

府立松原高等学校 「学校運営協議会」報告書(第3回)

日時	令和4年2月12日(土) 10:00-11:30			
出席者	運営協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	房本 晃	(福)バオバブ福祉会理事	島津 邦廣	校長
	菊地 栄治	早稲田大学教授	藤原 和子	教頭
	野崎 龍介	松原市立松原第三中学校校長	木村 悠	首席・人権教育主担
	森岡 次郎	大阪府立大学准教授	伊藤 あゆ	首席・2学年代表
	林 茂樹	摂南大学准教授	山口 裕子	人権教育主担
	安原 陽子	本校PTA会長	中川 泰輔	人権教育主担
	教職員等			
	亀田 恵美 田中 麻友 河合 美沙希 田ノ上 優光 麦田 伸一 眞杉 凌 須田 純次 米田 正樹 南 玲奈 平野 智之(追手門学院大学教授)			
主なテーマ	今年度の方針と計画			
協議内容の概略	<p>1. 学校長より 学校教育自己診断アンケート結果、学校教育計画</p> <p>2. 今年度の取り組み</p> <p>①46期の3年間を振り返って(南岡教諭) 3年間のすべての学校のプログラムを経験して、コンセプト「優しいチカラ」の理解や学びを得ることができた。そのために、準備をして臨むことが大切。生徒は、これから。社会で生かすことのできる力を育ててほしい。</p> <p>②初任者研修メンバーより(河合教諭、米田教諭) ・自分が経験した学校生活は基盤だが全てではないと切り離す指向が変化。生徒に助けられる部分も多く、「このためにやっている！」と思えた。来年度は準備をしっかりしていきたい。 ・1年間の生徒の成長を、近くでかかわって一番感じるすることができた。地域とのかかわりの深い学校で、アットホームな雰囲気がある。そのことも、もっと学んでいきたい。</p> <p>3. リレートーク「松高 Heritage」(参加者より)</p> <p>①準高生一えるで 易先生と、松原高校から一歩進ませるにはどうしたらいいか、松高を離れてもやれる子を議論した。「偉大な前衛ではなく、偉大な後衛を作る」。進学だけでなく、働く子がどうしているかを見てほしい。</p> <p>②人権の集いー総合学科 当事者との出会いに学ぶスタイルが確立された、17期生の取り組みは今にもつながっている。総合学科としての授業デザインも同様で、いろいろな人の思いを受け渡すことで生徒が変わっていく。E:ええこと思いついた、K:教官、共有から始まる、I:いろいろな人と一緒にやろう。</p> <p>③『あゆみ』の衝撃 文科省高校教育改革 PJ で、松原高校は自分たちの言葉で実践を表現していることに感動した。易先生は「一緒にやるのが大事」、と人のよい所を言葉にして伝えていた。「肩幅の狭い先生を支える」、「元気の出るようにやる」、と人をつなげていた。</p> <p>4. 協議委員会からのご意見、提言</p>			
提言内容・改善方策	<p>・1校目、2校目で松原高校に来られた先生は幸運。知的な優越は現場では通用しないと早い段階でわかる。一教科を教えるだけでなく、生徒と向き合い、自分を壊しながら、作っていく営みを。</p> <p>・いじめはないけど、エンパワーできているか?と問われたことがある。松高は生徒を送り出</p>			

したいと思える学校。

・週1回の学年からのメール配信に、助けられた。悪いことが重なったとき、先生方が一緒に考えてくれた。PTAの活動ができず、親のつながりができていないので、これからも先生方には保護者に寄り添っていただきたい。

・学校は必ず人が入れ替わるが、作り上げた人の思いが消えずに輪ができていく。誰かひとりではなく、すべての人たちが少しずつ作り上げている空気がただよっている。ともすれば、地域を大切にすることはここからできる、閉鎖空間になる。信頼できるスペースを作りながら、それを外に広げることが両立するにはどうすればいいか？ポイントは「学び」。教育はすぐには結果につながらない。長いスパンで。

・「どれだけ対立があっても、最後は生徒のことで一致したらええねん」を大切にしたい。